

## 財団法人永井記念薬学国際交流財団

### 設立趣意書

星薬科大学永井恒司教授が、昭和61年9月1日、フィンランド国ヘルシンキ市において、国際薬学連合金メダル学術賞ヘスト・マドセンメダルを日本人として初めて受賞したのを記念して、同年10月25日に、任意団体の永井記念国際薬学基金を設立し、主に、外国人研究者を招いた年1回の記念講演会の開催や、薬学分野の研究者の海外渡航に対する助成等を行ってきた。しかし、薬学研究の一層の振興を図るためには、より充実した基盤のもとに、国際的な研究交流を積極的に支援することが重要であり、このため、財団法人永井記念薬学国際交流財団を設立しようとするものである。

国際薬学連合 (Federation Internationale Pharmaceutique, F. I. P.) は、1911年に設立された薬学の科学と職能に関し頂点にある国際組織であって、約70カ国のそれぞれの国を代表する薬学会などの薬学関係団体が正会員として加盟し、100カ国以上の国から個人会員が加入している。永井教授が受賞したヘスト・マドセンメダル(Hoest-Madsen Medal)は、この国際薬学連合が、全世界の薬学研究者の中から特に顕著な功績のあった者を2年に1人選んで授賞するものである。永井教授は、長年に亘り、薬物の生物学的利用能(薬物の体内への取り込まれ方)の解明と製剤学的制御に関する先駆的な研究を続けて来たが、その功績が国際的に特に顕著であるという評価を得て受賞者に選ばれた。この賞はデンマーク出身のすぐれた薬学研究者であり元国際薬学連合会長を務めたヘスト・マドセン博士の栄誉をたたえ、1955年に設定された金メダルである。以来永井教授の受賞は17人目であり、冒頭に述べたように日本人では初めてである。

薬学研究のグランプリと称せられるこの賞が永井教授に授けられたのは、当人はもとより、日本の薬学にとって極めて名誉なことである。とりわけ日本の薬学の水準が高いことが世界で認められたことになる。過去において、わが国の薬学は、欧米先進国の恩恵を受けて発展し、今日の高い水準に達した。そして、もはや受益者ではなく、世界の薬学の担い手としての使命を帯びるに至った。しかしながら、現状では、わが国の薬学分野における研究活動は、国際交流に関するものを多く含むとはいえ、世界の薬学の担い手としての使命を果たす域にはまだ遠い感がある。したがって、この法人のように、特に国際的な研究交流の推進に力点をおく財団が存在することは有意義であり是非とも必要と考えられる。

このようなことに鑑みながら、この法人は、目的の達成のため、広く薬学に関する国際交流を推進し、発展途上国における研究や人材養成の援助なども含め、薬学分野での国際貢献に資する事業を展開して行く。そして、具体的には、国の内外を問わず、薬学分野における、国際共同研究及び基礎的・応用的研究の助成、研究者・医療従事者・学生の国際交流の奨励、国際研究集会の開催及び助成、顕著な功績のあった者の褒賞、などを行う。

以上が、財団法人永井記念薬学国際交流財団の設立趣意である。

平成5年10月20日

#### 設立発起人

荒田洋治	安茂寿夫	飯田益雄	稲葉恵一	小野田正愛
神戸毅	北澤式文	木暮剛平	小西良士	杉原正泰
永井恒司	日高啓	福田英臣		